

おむすび

だれも信じてくれないだろうな、と公子は思う。以前、娘に話したら、笑われた。

「おかあさんたら。ほんと、話つくるのがうまいんだから。」

そうだろうなあ。走ってきて、ジャンプして、二階の手すりにつかまるなんて。そんな奴がいるなんて、信じられないほうが当たり前かもしれない。でも、本当だった。

「なんかない？」

窓の外の鉄の手すりにつかまり、懸垂をしながら、坂本くんは、いつも聞くのだった。坂本くんの「なんかない？」というのは、もちろん食べ物のことだった。坂本くんは、ハイジャンプの選手で、いつもおなかをすかせていた。

「おむすびならあるよ」

公子がそういうと、坂本くんは嬉しそうな顔をした。

「もらっている？」

仕方なく、公子もうなずく。坂本くんは、何個おむすびを持っていくつもりなんだろう。

公子の家は兼業農家で、家に、米だけはふんだ

んにある。遠く離れた大学に行った娘を案じて、父親は、しよちゆう米を送ってくる。

「金がなくても、食いもんさえあれば、どうにかなる」

父親はいつもそう言っていた。送られてくる米の量が、はんぱではない。

三十キロ袋二個を、若い娘がどうやって食べるというのか。ダイエットなんかしていないが、それでも余る。毎回五合は炊いて、ほしい下宿生にはあげていた。伝え聞いて、坂本くんみたいな男が、下宿のまわりをうろろする。公子の父親は、娘の身を案じて、かえって危ないことをしたことになる。

食料を確保した安堵感からか、坂本くんの懸垂はかるやかだった。十回懸垂を十回繰り返すと、坂本くんの姿は窓から消えた。すぐに、ドアがノックされる。いくらなんでも、早すぎる、おむすびをビニール袋に入れながら、公子はそう思った。

「はむちゃあん」

またか。今度は坂本くんではない。

「米をくださいあい」

「はむちゃあん、来週遊びに行きましょう。だれか、女の子つれておいでね。」

ドアを開けると、にこにこ顔の坂本くんの後ろに、隣の男子寮の棟に住む、おんなじゼミの男が立って

いる。

こいつのおかげで、公子はみんなからはおむちゃんと呼ばれる羽目になった。今なら、ハムスターを連想して、かわいいといわれるかもしれない。しかし、三十年以上も前の話である。

「ハム？」

と訊かれるのが関の山だった。公子の公の字を分解すると、片仮名のハムだ。でも、絶対、あいつはあたしの立派な腕を見て、このあだ名をつけたに違いない。あのとき、ノースリーブのワンピースなんか、着なきやよかった。初めての寮祭で、かっこつけたからだ。

あの頃は、まだうきうきしていた。大学に入った。それも共学だ。親は心配したが、公子は自分の人生が開けるような予感がした。彼とまではいかなくても、男友達に囲まれる自分を。まさか、米につられて、男どもが寄ってくるとは。かわいいノースリーブのワンピースを、誰も褒めてくれることはなく、はおむちゃんと言うあだ名だけが付いてしまった。

「はおむちゃんはいいよねえ。人気があって。」  
真顔で言う女友達もいる。

「彼氏なんかより、いっしょに騒げる男友達のほうがいいじゃん」  
よくないよ。

「はおちゃんはゴムまりみたいで、女の子らしくていいね」  
同性の友達に褒められても、公子はうれしくもな  
んともない。

米泥棒のあいつとは、長い付き合いになった。就職  
してみたなら、おんなじ会社だった。あいつは意外に  
律儀で、公子を、はおちゃんとみなに紹介し、公子  
はすんなりと会社に溶け込んだ。おかげで、営業  
もやりやすかった。

米泥棒の上司はあいつとは大違いで、びっくりす  
るほどかっこよかった。最初に会ったときから、公子  
をはおちゃんと呼んだが、ちっともいやではなかった。  
数年経って、結婚を申し込まれた時、なにかの間  
違いではないかと思ったものだ。今でも信じられな  
い。

「やっぱりお母さんに似ればよかったなあ」  
部活から帰ってきた娘が言う。帰宅したと思ったら、  
着替えもせず、もう食べている。テーブルの上には、  
おむすびが山のようにある。相変わらず、公子は  
おむすびを作る。娘のよく食べることに、見ていると  
気持ちがいい。お父さん、ありがとね。いまだに米を  
送ってくれる実家の父に、公子は感謝する。

「何が？」

娘の言葉が嬉しくて、公子は訊く。娘は、お父さんに似て背が高いから、バスケットボールに熱中した。公子も夫が好きだが、娘は小さいときから、お父さんが大好きだ。お父さんに似ていると言われるたびに、娘は喜ぶ。失礼な、と思う反面、公子もそれが誇らしい。頭もよくて、性格もよくて、うちのおとうさんは最高だ。

「おとうさん、ほら、筋肉ないじゃん。すらっとしてるけど、考えてみれば、ひよろひよろなんだよね。あたしも、いい筋肉つかないんだよね。鍛えてるんだけど。やっぱ、遺伝するのかな。おかあさんに似ればよかった。おかあさんの腕、かっこいいもんね」

坂本くんの腕は、たしか筋肉、すごかったはずだ。懸垂ができるんだから。思い出そうとするが、思い出せない。

「なんかある？」

出てくるのは、のんきな坂本くんの声だけだった。